



しみず たかお
清水 孝雄氏

東大医学部長



1947年東京都生まれ。73年東大卒。京大医化学教室、スウェーデン・カロリンスカ研究所などを経て91年東大第二生化学教室(現生化学・分子生物学教室)教授に就任。2007年4月から同大院医学系研究科長、医学部長を併任。武田医学賞など受賞多数。

今

年5月に創立150周年を迎える東大医学部。医学界を常に主導し、その歩みは日本の近現代史とも深く関わってきた。

大きな節目を迎えたいま、東大はこれから何を目指していくのか。医学部長の清水さんは「東大は最高水準の研究を行うことが使命。その原点に立ち返り、明日を担う医学研究者の育成を進めます」と明快に語る。

世界の主要な大学は今、激しい研究競争でしのぎを削っている。これに勝ち残るには優れた研究者を多く育てることが必須。このた

「東大の原点に立ち返り、明日を担う」

医学研究者の育成を進める」

め清水さんが手がけたことの一つが「MD研究者育成プログラム」の創設だ。

これは基礎の研究者を育てることが主な目的。通常の授業に加え、少人数のゼミ、海外への留学、大学院生との交流などを提供する。卒業後はそのまま大学院に進んで研究に専念する。もちろん、臨床を希望すれば院修了後に臨床研修を受ければよい。勉強は極めてハードだが、今年1月、医学部進学予定の2年生にアンケートをとったところ、何と30人が「このプログラムを受けたい」と回答した。

「卒業して初期研修と後期研修を受けると30歳近くになります。それから基礎に進むのは大変で、早い時期から研究の場を与えることがプログラムの目的です。これに挑戦しようという学生が多いことに私たちも勇気づけられましたね。彼らが10年後、20年後の日本の医学研究を担ってくれることに期待したいと思います」

清水さんの専門は生化学。きっかけは大学卒業後、第三内科で呼吸器のグループに参加したこと。当時、肺は「ガス交換のための臓器」という考え方が主流だったが、清水さんは代謝でも重要な役割を果たしていることに注目。京大に移って早石 修教授の下で代謝を学んだ。

以来、プロスタグランディンなど生理活性脂質が脂質代謝にどう関わっているかを研究、この分野



山岳部の先輩・行山 康氏(富士通川崎病院顧問)と北穂高岳を望む。毎年夏には濁沢小屋の出張診療所で診療を手伝う

の第一人者として世界に知られている。

清水さんの研究室では、2年前から界面活性脂質(サーファクタント脂質)の合成に関する研究で画期的な成果が出始めており、肺の難治性疾患や癌など臨床への幅広い応用が期待されている。「まったくの学問的興味で始めたことが、臨床にも活かされる。基礎医学の重要性を痛感しますね」

趣味はスポーツ。多忙な日々、わずかな時間を見つけては週1、2回、テニスコートで汗を流す。登山は中学生の時から。かつては冬の北鎌尾根(北アルプス)に挑戦したほどの上級者。今は3シーズン山の山登りで我慢している。